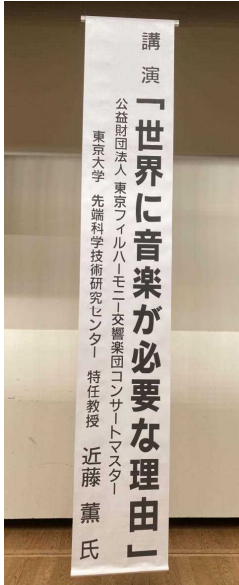


◆ 世界に音楽が必要な理由 ◆



本メッセージのタイトルは、東京フィルハーモニー交響楽団コンサートマスター・東京大学先端研特任教授、近藤薫氏の著書『金のオタマジャクシ、そして感性の対話』（花乱社）の副題である。

先月29日に開催した2年ぶりとなる今年の茨城県高等学校総合文化祭「総合開会式」。構成を大幅に見直した。本物に触れることで揺さぶられる「感性」、そしてそこから紡ぎ出される「生きる力」を子どもたちと共有したいと考え、近藤さんの演奏に重きをおいた講演会を企画した。

エルガーの「愛のあいさつ」から始まった講演会。演題は、著書の副題そのものの『世界に音楽が必要な理由』

途中、近藤さんご自身のエピソードを挟み、終わりのベートーヴェン「クロイツェル・ソナタ」まで瞬く間に駆け抜けた。

著書の中にも触れられているけれども、近藤さんご自身、中・高時代、オーケストラ部でのご経験がある。今、同じように部活動に取り組んでいる子どもたちは、とても身近にその話を聞いたはずだ。また、近藤さんがある施設を訪ね演奏をされた際のエピソードは、私自身、発足したばかりの弦楽部の顧問をしていた頃の出来事と重なった。

ちょうどクリスマスの頃、請われて地元の施設を子どもたちとともに訪ねた。1年生だけの部活動。拙い部分は多々あったかと思うけれど、生徒たちは精一杯演奏した。クリスマスソングを中心に、そして今でもその学校がコンサートの最後に演奏していると聞いているパッヘルベルの「カノン」…、演奏を聴きながら、その施設の皆さんが涙を流して喜んでくれたことを思い出す。

今回の講演会は、改めて、モニカ・グリュッターズ独文化相の「アートは人類の生命維持装置」とのことばを思い起こさせてくれるものとなったと思う。

ところで、コロナ禍の弊害ばかりが俎上に登るけれど、合唱部会等の各部会紹介を動画によるものとした今回の「総合開会式」。内容を精選し、視点を転ずることによるプラスの側面を見出す契機となったように思う。今後もよりよい「総合開会式」の在り方を模索したい。

子どもたちが、そして我々も元気になる「金のオタマジャクシ」を見つけることを大事にしたいものである。